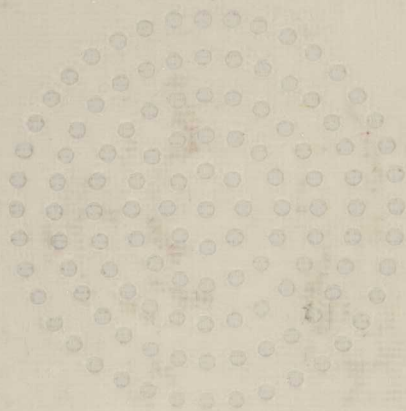
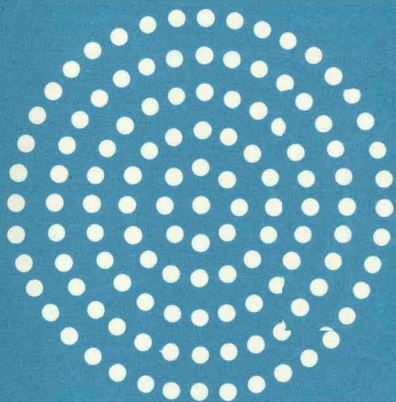




世界の詩集 15

エリオット詩集



上田 保訳

訳者 上田 保

1906年に山口県で生まれる。1929年に慶応義塾大学英文科を卒業。イギリス、アメリカを主としてヨーロッパ現代詩に親しむ。慶大名誉教授。

〔主要著訳書〕『概説世界文学』（創元社）、『ヨーロッパ文学入門』（慶応通信）、『現代文学の鑑賞』（宝文館）、『ロレンス生きぬいてきた！』（国文学の読み方）（宝文



世界の詩集

15

エリオット詩集

写植 株式会社 研

製版 植竹プロセス製版株式会社

印刷 暁美術印刷株式会社

製函 三真堂印刷紙器株式会社

製本 株式会社 鈴木製本所

昭和四十八年二月十日 初版発行
昭和五十三年八月十五日 四版発行

訳者 上田 保

発行者 角川春樹

発行所 角川書店

東京都千代田区富士見二ノ十三
●一〇二(●東京三十一)九五二〇八
電話 東京(二六五)セ二一(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

目
次



未完成の詩

二九

【岩】の合唱

二五

闘技士スウィーニー

合唱 I

二五

あるフロログの断片

合唱 II

二六

勝負あらそいの断片

合唱 III

二六

合唱 VI

二七

合唱 IX

二七

合唱 X

二七

小さな詩

二五

バーント・ノートン

二八一

五本の指の練習曲

二五

ラーフ・ホジスン氏によせる歌
カスカスキヤラウェイとミルザ・ムラ

二五

ド・アリ・ベッグによせる歌

解説

一九三

年譜

二五二



エリオット詩集

ブルーフロックとその他の観察

アルフレッド・ブルーフロックの恋歌

われもし、わが答への、ふたたび

世に帰りゆく人に聞かるものと思わば、

この焰は静まりて、また、

ゆらぐことなからん。されど、

わが聞くところ真ならば、この深みより生きてかえりしものなきゆえに、

われは名を汚すおそれなしに答うるなり。

さあ、いっしょに出かけよう、君と僕と、

手術台で麻酔^{マズイ}にかけられた患者のように

夕暮が空いちめんに広がるとき、

人通りのまばらな街をとおって、いっしょに出かけよう、

ひと晩どまりの安ホテルに流れこんで、

眠られぬ夜にもらすささやきや、

カキ殻のちらばったオガ屑の料理屋。

悪意にみちた

ながい議論のようにつづいて

逃げばのない疑問にひきずりこむ街……

おお、「それはなんだ」なんて、きかないでくれ。

いっしょに出かけて訪問しよう。

部屋のなかでは、女たちが行ったり来たりして

ミケランジェロのことをしゃべっている。

窓ガラスで背中をこする黄いろい霧は

窓ガラスで鼻づらをこする黄いろい煙は

あちこちの夕暮のすみで舌なめずりをし、

下水によどむ水溜りで思案し、

煙突からおちるススを背中にうけ

露台をすべって、いきなり飛びおりたが、

おだやかな十月の夜だとわかると、

家のまわりで、ひと渦まいて眠てしまった。

窓ガラスで背中をこすってから

ゆっくり街を流れる黄いろい煙には、
なるほど、暇があるのだ。

暇が、君の会う顔に会うため
顔をつくる暇があるのだ。

人殺しをする暇も、産みだす暇も、
毎日のあらゆる仕事をてがける手が
疑問を持ちあげ、君の皿のうえにおとす暇、
トーストを食べ、茶をのむまえに、

君にも僕にも暇がある、

まだ、百度も決断をしぶり、

見てから、百度も見なおす暇がある。

部屋の中では、女たちが行ったり来たりして
ミケランジェロのことをしゃべっている。

たしかに、まだ「思いきって、やってみようか」

「ひとおもいに」と、考えなおす暇がある。

振りむいて、頭のまんなかに
禿をみせながら、階段をおりる暇がある。

「あの人のかみ毛は、すっかりうすくなりましたわ」と彼女らはいうだろう。

おれのモーニング・コート、おれのカラーは、ぐっとアゴをしめつけ
おれのネクタイは、はでで上品で、一本のヒンでひきたっている。

「だって、あの人の手足は、なんて、やせてるんでしょう」と彼女らはいうだろう。
思いきって、おれに

宇宙がかきみだせるか。

この一分間に、一分間であべこべになる

見なおしと決断の余地がある。

それというのも、おれはもうすっかり知っているのだ、みんなすっかり知りつくしたのだ。

朝も夕暮も午後も知っている、

おれはコーヒーのサジで、おれの一生を計ってしまった。

おれは、むこうの部屋からひびく音楽にかきけされて、

息もたえだえに消えてゆく声を知っている。

それなのに、今さら、どうしてやれよう。

しかも、おれはもう、あの眼を知っている、みんなすっかり知っている――

君たちを公式的なきまり文句にはめこむ眼、

そして、おれが公式的なきまり文句で、腹ばいに、ピンで刺されたとき、

ピンで壁に刺されて、もがきまわるとき、

いたい、どうして、おれの日頃のやり方の一部しじゅうが吐きだせるか、
それなのに、今さら、どうしてやれようか。

しかも、おれはもうあの腕を知っている、みんなすっかり知っている――
腕輪をはめた、あらわな白い腕

（だが、ランフの光でみると、うす茶いろのわた毛がはえている！）

おれの氣持をこんなにかきみだすのは、
着物からたちのぼる香水のにおいなのか。

ショールを巻きつけ、テーブルの上になかくのびた腕

さてひと思いにやってみようか。

どうきりでしたらよいのか。

* * * *

たそがれどき、せまい街をとおって、

ワイシャツだけで、窓からのりだした淋しい男たちの
パイフからたちのぼる煙を見ましたとでもいおうか。

いっそ、二枚のカニ鉗ばさみになって

静かな海の底をこきざみに走ったほうがました。

* * * *

そして午後も、夕方も、ほんとに安らかに眠っている！

ながい指に愛撫されて

ぐっすり……疲れて……いや、仮病かりびょうかもしれぬ、

ゆかの上にねそべって、君と僕のすぐそばで。

お茶やお菓子やクリームをたべたあとで、いったい、おれに、

その場を大詰へもってゆくだけの力があるのか。

とにかく、おれは泣いて断食し、泣いて祈ったが、

おれは、すこし禿げあがったおれの頭が大皿にのせられて、持ってこられるのを見

たが、

おれは預言者ではない——もっとも、それは大したことではない。

おれは、おれの偉大な瞬間がゆらめくのを見たし、

また、永遠の《徒卒》がおれの上衣をもって、にやにや笑っているのを見た、

要するに、おれはこわかったのだ。

酒やマーマレードやお茶のあとで、

磁器のたぐいにかこまれて、君や僕のぐわさのあとで、

つまり、それだけの値うちがあっただろうか。

微笑をうかべて事件をひと思いにのみこみ、

宇宙をボールにまるめて

あの逃げばのない疑問のほうへころがしこみ、

「わたしは、死者のなからよみがえり、あなたに

すっかり話するために、もどって来たラザロです、さあ、話しましょう」というだけの値うちが――

もし相手の女が、頭のそばに枕をおいて、

「わたし、そんなつもりじゃありませんわ、

ほんとに、ちがいますわ」とでもいうとしたら。

いったい、それだけの値うちがあつただろうか、わざわざやるだけの値うちがあつただろうか。

日暮れや、まえ庭や、水をうった通りのあとで、

小説や、紅茶茶ワンや、ゆかをなびくスカートや、

その他さまざまのあとで。

おれの気持をすばり言いあてることなんかできないのだ！

まるで、幻灯が、いろいろな型に、神経を写しだしているようなものだ。

いったい、それほどの値うちがあつただろうか、

もし相手が枕をおき、すつとショールをとって、

窓のほうをむき、「ほんとに、ちがいますわ、

わたし、そんなつもりじゃありませんわ」とでもいうとしたら。

いや、おれはハムレット王子ではない、また、そう生れついてもいない。
お附きの貴族にすぎないのだ、すじの進展、

場面の工夫に一役かって、王子に進言する従臣。

まったく、手がるな道具、

うやうやしく、役にたてば喜び、

術策にたけ、用心ぶかく、小心よくよく、

大言壮語のわりには、ちょっと頭のめぐりがにぶい、

ときには、まったく物笑いの種になり、

ときには、ほとんど《道化もの》。

おれは年をとって、ふけてきた

ズボンのすそをまくって着よう。

うしろで髪をわけようか、桃を食ってみようか。

白いフランネルのズボンをはいて、海岸を歩いてみよう。

おれは人魚がたがいに歌いあうのをきいた。

人魚たちは、おれに、歌いかけているのではあるまい。

風が、海のうえを、白く黒く吹きわたるとき、おれは

人魚たちが、なびく波の白髪をくしけずりながら、

波にのって、沖の方へゆくのを見た。